

# コロケーションと独和辞典の記述

## ー コロケーション活用の可能性と限界 ー

井口 靖<sup>1</sup>・恒川 元行<sup>2</sup>・成田 克史<sup>3</sup>・黒田 廉<sup>4</sup>・カン ミンギョン<sup>5</sup>

### 要 旨

母語話者は語を単独ではなく、慣用的な結びつきであるコロケーションで記憶し、活用していると考えられる。それを独和辞典に反映できれば、ドイツ語を習得するのに効率的になる。本稿では、コロケーションにおける頻度とそれに基づく語義記述の問題について指摘した後、品詞別に問題点を検討する。動詞の用例にコロケーションの観点からどのような情報を付加すべきか、名詞がどのような動詞と共起するかがコロケーション辞典において適切に記述されているか、形容詞・副詞について語義の順序と語義の切り分け方にはどのような問題があるかについて検討する。最後に句例と文例に関して辞典記述のあり方を考察する。これら考察を通じて、辞典記述の道具としてコロケーションを活用する可能性と限界を示すことになろう。

### 1. はじめに

語を文法通りに並べても必ずしも自然な文になるわけではない。母語話者は語を単独ではなく、慣用的な結びつきであるコロケーションで記憶し、活用していると考えられる。それを第二言語として習得するために効率的なことは辞典になんらかの形で反映することであろう。私たちのプロジェクトでは、ドイツ語の大規模コーパスを用いてコロケーションを調査し、その結果を各種辞典と照合し、独和辞典上で活用していくことを目指している。井口ほか(2018)では、コーパスを用いたコロケーション分析について問題点を指摘した上で、実際にコーパスを分析し、コロケーションを抽出して、それを「意味的関連性」の観点から整理するとともに、コーパスの分析結果と独和辞典、独独辞典、コロケーション辞典の用例を照合して、現在の各種辞典の記述の問題点を探った。

本稿では、動詞、名詞、形容詞・副詞を中心語に分析したコロケーションを現在の独和辞典等の記述と照合し、どのように辞典を記述していくべきかを検討する。まず、2.では、コロケーションにおける頻度とそれに基づく語義記述の問題について指摘する。その後、品詞別にさまざまな観点から考察を行うが、3.では動詞の用例にコロケーションの観点からどのような情報を付加すべきか、4.では名詞がどのような動詞と共起するかがコロケーション辞典において適切に記述されているか、5.では形容詞・副詞について語義の順序と語義の切り分け方にはどのような問題があるかについて検討する。6.では句例と文例に関して辞典記述のあり方を考察する。これら考察を通じて、辞典記述の道具としてコロケーションを活用する可能性と限界を示すことになろう。

## 2. コロケーション分析と辞典記述の問題点

従来の辞典編纂の作業は、母語話者の絶対的な語感に依存する部分が大きかったが、現在では、コーパスを用いることで誰もが気軽に母語話者の言語使用に触れることができ、コーパスは辞典編纂において欠かせないツールとなっている。赤野・井上（2018）によれば、日本で本格的にコーパス言語学の手法を採り入れて編纂されたのは、2003 年刊行の『ウィズダム英和辞典』（以下『ウィズダム』）であるという。それが今からわずか 15 年前のことであることを考えると、その間、コーパスと辞典の関係には大きな変化があったと言える。

辞典編纂におけるコーパス活用の意義として、赤野・井上（2018）は、①簡単に語の典型的な使用例を引き出せる網羅性、②母語話者の言語直観の補完、③辞書記述の精緻化、④新たな言語事実の発見、などを挙げている。これらは、実際の辞典編纂において、主に語義記述と用例記述に反映されることになるが、その際、コロケーション分析が大きな意味を持つ。なぜならば、言うまでもなく、語の意味はその語の使用例に基づいて記述されるものであり、語の用いられ方はコロケーション分析を通じて把握できるからである。また、実際の言語使用において多用されるほど、重要なコロケーションと見なされることから、コロケーション分析では「使用頻度」が重要な指標の一つとなる。コロケーション分析の成果はすでにさまざまな形で辞典記述に活かされているが、その方法論については今だ未解決の課題も多い。このような認識のもと本節では、コロケーション分析とその辞典記述への応用における問題点について、とりわけ使用頻度と語義記述を中心に考えてみたい。

使用頻度の高い基礎語彙には多義語が多く、また多義語ではない場合でも、そもそも外国語の語に日本語の訳語をつける際、1 対 1 の対応はほぼ不可能である。したがって、複数の語義または訳語の配列が問題となる。

赤野・井上（2018：21f.）は、名詞 *press* を例に、コーパスを活用し、使用頻度を考慮して編纂された『ウィズダム』の語義配列（2-1）と、同タイプの他の英和辞典の語義配列（2-2）を紹介している。以下に引用する。

- (2-1) 1a. 報道機関、1b. 記者団、1c. 報道、2 印刷所、出版社；印刷機；印刷、3 圧縮機、  
4 押すこと；アイロンをかけること、5 混雑、6 切迫、7 ベンチプレス、8 大型戸棚  
(2-2) 1 押すこと、2 アイロンをかけること、3 押し進むこと、4 切迫、5 圧縮機、  
6 印刷機；出版（業）、7 新聞、8 報道機関、9 戸棚、10 重量挙げのプレス、  
11（新聞名の）…プレス

このように、言語使用における頻度の観点を入れるか否かで、語義の配列は大きく異なってくる。ある語がどのような意味で用いられるかは、当然ながら当該語だけを見てわかるものではなく、その語がどのような語句と結びついて用いられているか、すなわちコロケーションのレベルで見る必要がある。たとえば、*press* が「報道機関」や「新聞」の意味で用いられる場合と、「押すこと」や「アイロンをかけること」の意味で用いられる場合とでは、*press* と結合する語句の種類が大きく異なるはずなのである。

この例を踏まえ、以下では、2 つのドイツ語動詞の例を取り上げ、共起語の頻度と語義記述の関係について考察してみたい。

まず、動詞 *brechen* についてである。『アクセス独和辞典』第 3 版（以下『アクセス』）では、*brechen* の他動詞用法の語義を次のように記述している（用例などは省略）。

- (2-3) 1 折る ; 壊す ; 割る、2 (記録などを) 破る、(抵抗などを) 打ち破る、  
3 (光・音を) 屈折させる、4 (血・食べ物などを) 吐く

一方、DWDS-Wortprofil<sup>6</sup>によれば、brechen の目的語<sup>7</sup>として logDice の高い名詞 (brechen との結びつきが強い名詞) は次の順になっている。

- |       |                |               |              |                |               |
|-------|----------------|---------------|--------------|----------------|---------------|
| (2-4) | 1. Schweigen   | 2. Rekord     | 3. Tabu      | 4. Genick      | 5. Lanze      |
|       | 6. Bein        | 7. Widerstand | 8. Herz      | 9. Versprechen | 10. Stab      |
|       | 11. Bann       | 12. Arm       | 13. Rückgrat | 14. Knochen    | 15. Eis       |
|       | 16. Weltrekord | 17. Macht     | 18. Gesetz   | 19. Regel      | 20. Nasenbein |

これらのうち Genick, Bein, Arm, Rückgrat, Knochen, Nasenbein の身体部位名詞の 6 語を除く 14 語はすべて抽象名詞で、そのほとんどは『アクセス』の語義 2 に当てはまるものである。Stab と Lanze や身体部位名詞の Genick と Rückgrat など、特定の慣用表現で用いられるものも比較的高頻度の共起語となっている。<sup>8</sup> 一方、辞典によく挙げられる brechen の第一語義の用例 (einen Zweig brechen (枝を折る)) における Zweig のような具体名詞は少なくとも (2-4) には含まれていない。<sup>9</sup> このように、コロケーションの頻度の観点で見た場合、動詞 brechen の語義配列は (2-3) とは異なってくる。

次に、動詞 kaputfahren を例に挙げる。この動詞は基礎語彙ではないため、学習辞典では収録されないことも多いが、『アクセス』には見出し語として収録されており、語義を (2-5) のように記述している。(2-6) はこの語義に合う代表的な用例である。

- (2-5) kaputt | fahren [車<sup>4</sup>を] (事故・誤った運転で) 壊す  
(2-6) Er hat das Auto/den Wagen kaputt gefahren.<sup>10</sup>

DWDS-Wortprofil でも、動詞 kaputfahren の共起語は目的語 Auto 一語しか表示されない。そもそも使用頻度が高い動詞でもなく、また結果構文を形成するというある意味特殊な用法の動詞であることを考えると、(2-5) のような記述で十分であろう。しかし、ここであえて他のコーパス (DeReKo<sup>11</sup>) による調査に言及するならば、その結果は辞典記述とかなり異なる。具体的に言えば、DeReKo から収集した kaputfahren の事例 318 例における目的語 (kaputt の主体; 受動文の主語を含む) の意味カテゴリー別分布は次のとおりである。

- (2-7) a. 場所 (Straße, Weg, ...) : 209 例  
b. 手段 (の一部) (Auto, Wagen, ...; Frontflügel, Reifen, ...) : 58 例  
c. 衝突対象 (Lampe, Zaun, ...; 人<sup>12</sup>) : 51 例

以上、2つの動詞 brechen と kaputfahren の共起語分析の例を示した。ここで、このような結果をどのように解釈し、辞典記述に反映させるかが問題となる。使用頻度を重視する立場から端的に言うならば次のようなことになるが、果たしてこれが妥当だろうか。おそらくそうはならない。

- (2-8) a. (2-4) のような結果に基づき、動詞 brechen の第一語義を「(沈黙・記録などを) 破る、(抵抗などを) 打ち破る」にする  
b. (2-7) のような結果に基づき、動詞 kaputfahren の語義を「[道路を] (重量・事故・誤った運転などで) 壊す」とする

それでは、コロケーションの頻度は何を示す指標として捉えられるだろうか。上記のような動詞の共起語の頻度の場合、「動詞＋名詞」が表す事柄が現実世界でどれほど頻繁に生じているか（事柄の頻度）、またその事柄がどれほど話題や表現の対象になりやすいか（人の関心の度合い）を示す側面があると考えることができる。使用頻度が結局のところ、人が音声または文字で発した回数を基にしていることを考えると、後者の意味合いが高いとも言えるが、話題や表現の対象となる事柄は当然コーパスの種類（テキストのジャンル）や年代と地域によって異なる。上で示した動詞 *kaputtfahren* の例で言えば、出来事自体の発生としては（道路の損傷より）事故や車の故障の方が多いはずだが、コーパスでは運転による道路の損傷を表す事例がはるかに多く観察された。しかしこれはやや特殊な例で、何らかの社会的事情が影響しているとも考えられるため、現時点で *kaputtfahren* の語義を（2-8）b のように記述することは妥当ではないだろう。コーパス分析の結果を辞典記述に反映させる際は、辞典の汎用性という側面も意識する必要がある。

使用頻度に関連して、もう一点付け加えておきたい。それは、田野村（2010）も指摘している、同じ事例の複数回ヒット問題である。特に各種新聞や雑誌が含まれる書き言葉コーパスには、同じニュース記事がほぼ同じ文面で再生産され、出典のみ異なるデータとして含まれていることが多々ある。定性的分析の場合には大きな問題にならないが、使用頻度など定量的分析を行う場合は看過できない。しかもこのような問題は、コーパスサイズの拡大に比例して増加しており、Web コーパスの場合、そのような傾向はさらに顕著である。筆者はこれまでのデータ分析で、同じ事例の2例目以降は手作業で可能な限り除外してきたが、扱うデータの量が膨大になれば、その作業には実際のところ限界がある。また、重複事例の削除とはいえ、検証の透明性を考えるならば、データに任意で手を加えることは本来好ましいことではない。コーパスデータに含まれるいわゆる「ごみ」や重複事例がどれほど分析結果に影響を及ぼしうるかについては、一度検証してみる必要があるかもしれない。

以上、コロケーション分析の辞典記述への応用における問題点について述べた。このような点を意識しつつ、言語使用の実態を適切に反映した辞典記述を目指して、今後も方法論の検討を続けたい。次節以降では、品詞別にいくつかの検討事例を示す。

### 3. 動詞から見たコロケーションと辞典記述

ここでは、動詞の辞典記述について、コロケーションの観点から、記述されてきた要素と有用性の問題を考える。

2言語間で表現が一致することはまれである。特に動詞はさまざまな語句と結びつき、対応する日本語は複雑な変化を示す。次の『アクセス』の例では、動詞 *reiben* について、結合する語句の違いにより、訳語が変化する様が見て取れる。①の場合、語義として「こする」という単一の動詞が訳語として与えられている、②では「こすって…にする」という複合的な動詞表現で、③では「こすり取る」という複合動詞で、語義が記述されている。

- ① 《4格》[…<sup>4</sup>を] こする、摩擦する▷ *sich<sup>3</sup> die Nase reiben* 鼻をこする
- ② 《4格＋状態》こすって[…<sup>4</sup>を…に] する▷ *Er rieb den Tisch blank.* 彼はテーブルをふいてぴかぴかにした
- ③ 《4格＋aus/von＋3格》[…<sup>4</sup>を…<sup>3</sup>から] こすり取る、こすり落とす▷ *den Schmutz von der Fensterscheibe reiben* 窓ガラスの汚れをこすり取る

動詞と他の語句との結合に関して、近年の学習独和辞典では、上例のような文型（文法的コロケーション）については、記述を充実させてきた。文型についての情報は、学習者が適切な文を作る上で不可欠であり、またそれを手がかりに適切な語義を探し当てられるという点でも有用である。しかし、文型を構成する、どちらかと言えば、文の成立に必須な要素の情報はあっても、必須でない要素についてはあまり記述がなされていない。たとえば、『アクセス』の挙げている動詞 *ändern* の用例 8 例では、4 格目的語あるいは主語は示されているが、それら以外の要素は ①の *nicht* あるいは②の *sehr* ぐらいである。

1 他① […<sup>4</sup>を] 変える、改める、変更する▷ *das Verhalten ändern* 態度を変える /*den Plan ändern* 計画を変更する /*den Text ändern* 文章を書き改める /*den Mantel ändern lassen* コートを仕立てなおしてもらう /*Es ist nicht zu ändern*. それは変えようがない; それはどうしようもない

② […<sup>4</sup>を] (態度・考え方などに関して) 変える▷ *Dieses Erlebnis hat ihn sehr geändert*. この体験で彼はとても変わった。

2 再変わる、変化する▷ *Das Wetter ändert sich*. 天気が変わる /*Die Situation hat sich geändert*. 状況は変わった

動詞 *ändern* は、4 格目的語、主語以外にも副詞類としばしば用いられる。Wortprofil で *ändern* の副詞類をみると、logDice 順でトップに来るのは *daran* で、頻度も 3 位と高い。<sup>13</sup> 4 格目的語では、*Meinung* が logDice 順でも頻度順でも 1 位だが、数値的には *daran* の方が高いくらいである (*daran* の logDice: 10.1、頻度 8902 に対し、*Meinung* の logDice: 10.0、頻度 2426)。DeReKo から „zu ändern“ の例 925 を手作業で分析した結果でも、<sup>14</sup> *daran* は頻度順 2 位で 38 例ある。DeReKo の例で、融合形でない *an* 前置詞句をみると 44 例と *daran* 以上に多く、頻度順 1 位である。前置詞句という形では出力されないものの、Wortprofil でも前置詞 *an* と名詞の組み合わせはやはり多い (logDice 順に *durch Beschluß*, *an Tatsache*, *im Laufe*, *an Situation*, *an Haltung*, *an Zustand*, …)。<sup>15</sup> DeReKo の例で *an* 前置詞句、*daran* と共起する語も見てみると、変化の量を表す *etwas* (50), *nichts* (19), *irgendetwas* (2), *viel* (4), *wenig* (3) などが多い。<sup>16</sup> 以上のことから、*ändern* には次のような用例があるとよいということになる。

(3-1) *Ich sehe keinen Grund, daran etwas zu ändern.*<sup>17</sup>

他の副詞類については、Wortprofil では上位に *grundlegend*, *schnell*, *schlagartig*, *bald*, *radikal* などの変化の程度、時間に関わる副詞が挙げられている。これらは、コロケーション辞典の Buhofer et al. (2014), Quasthoff (2011) にも見出され、追加候補となるであろう。

次に、異なる訳例を示そうとして、さほど有用でない用例を採用してしまう問題を取り上げる。(3-2/3) は学習独和辞典『アクセス』『アポロン独和辞典』第 3 版 (以下『アポロン』『クラウン独和辞典』第 5 版 (以下『クラウン』) の *ändern* にある用例の一つである。

(3-2) *den Mantel ändern lassen* コートを仕立てなおしてもらう 『アクセス』

(3-3) *ein Kleid ändern* ワンピースを仕立て直す 『アポロン』『クラウン』<sup>18</sup>

上記の用例では、*ändern* の訳語は、語義記述にある「変える」とは別の「仕立て直す」となり、訳出する際に注意が必要である。このような表現に接した場合、学習者は *ändern* を「変える」で置き換えて「交換する」という意味に解釈してしまうかもしれない。上記の用例は *ändern* が対象全体ではなく、「付加・削除・細部の修正により変化させる」<sup>19</sup> こともうまく伝えている。用例を構成する語も平

易でよいが、初級の学習者にとってどれだけ有用かは疑問である。コートやワンピースを仕立て直すことはないわけではないが、それでも「変える」対象は他に様々ある。Wortprofil では、ändern の目的語 100 位以内に Mantel も Kleid もない。Buhofers でも、見出し語 ändern に衣類を表す名詞は出てこない。<sup>20</sup> 逆に Mantel, Kleid からみた場合も、これらが結合する動詞として、ändern は現れない。Wortprofil の Mantel, Kleid どちらの項でも、動詞 100 以内に ändern はない。Quasthoff でも Buhofers でも、見出し語 Kleid のコロケーションに ändern はない。Mantel についても、見出し語のある Buhofers に ändern は載っていない。

次は、『クラウン』の見出し語 verändern で挙げられている用例である。veränderte の訳語は動詞ではなく、語義記述の訳語「変える」をそのまま適用できない例ではあるが、用例自体はかなり使い方が限定されたものである。本用例は、特定の表現に対して存在する決まった訳語を示していると言える。<sup>21</sup>

#### (3-4) eine veränderte Auflage 改版

必須要素以外の語句の記述が不足していること、あまり有用でない用例が含まれている問題を取り上げたが、そのようになっているのには次のような理由が考えられる。一つには、独和辞典が受信型の道具であるということである。文型を直接構成しないような副詞類は、どちらかと言えば発信する際に表現を豊かにするために必要となるのであり、受信のためにはさほど必要ではない。語義記述中のものと訳語が異なる用例を採用するのも、訳語が同じなら理解にはあまり支障がないからである。また訳しづらい例の方が執筆者の関心を引くためということもあろう。スペースの問題も大きい。辞典はスペースの節約を優先する以上、どうしても用例を短くしようとする傾向がある。文に必須でない要素は削られることになる。長い用例は学習者の負担にもなり得る。訳語が特殊な用例を挙げる方が同じスペースで多彩な情報を提供することにもなる。最後に、用例の一般性あるいは典型性について判断する基準がなかったということがある。コーパスあるいは検索システム等が整備されておらず、執筆者は、独和辞典から経験的・直観的に、あるいはせいぜい手作業で収集した小規模の用例集から用例を選ばざるを得なかった。

独和辞典は基本的には受信用ではあるが、学習辞典の場合、発信用としても使われる性格を持つ。発信用には特殊な用例ではなく、その語の一般的・典型的な使用例を載せることが望ましい。受信用としても、出会う例と一致あるいは類似した用例がある方が学習者は理解が容易で確信が得られる。受信用としても発信用としても使える辞典を指向する場合、現在よりも多くの情報を載せることになろうが、スペース的には電子メディアあるいはオンラインという形で提供することが可能となっている。用例の一般性・典型性については、コーパスの整備・充実に伴い数値による客観的データを基に判断できるようになった。問題となるのは、情報の提示のしかた<sup>22</sup>と、多量の情報を処理するためのコスト（労力・時間・金銭面等）であろうが、模索を続けつつ、可能な範囲で実現していくしかないであろう。

## 4. 名詞から見たコロケーションと辞典記述

### 4.1. 本節の目的

昨年の研究報告（井口ほか 2018 第 4 章）では、若干の名詞語彙について、ドイツ語コロケーション辞典 Buhofers et al. (2014；以下 B と略記)、Quasthoff (2010；以下 Q) の記述、DWDS-Wortprofil の共起

語リスト（30 位まで；以下 DWDS）の 3 種を比較し、共通共起語が少なく、データ相互の重なりが 2 ～3 割程度と低いことを報告した。

本稿では、上記に Duden-Stilwörterbuch（以下 DS）を加え、再度、データの重なるの点から辞典におけるコロケーション記述を検証する。DS を取り上げるのは、データの幅を広げ客観性を高めるため、また長年、事実上のコロケーション辞典として用いられてきた DS の記述を、他との比較を通して見直すためである。

〈表 1〉 Finger と共起する動詞：「Finger4 格 + 動詞」の場合

共起する動詞	DS	B	Q	DWDS
krümmen	○	○	○	○ (7)
spreizen	○	○	○	○ (5)
ablecken	○	○		○ (28)
bewegen		○	○	○ (17)
einklemmen	○	○	○	
lassen	○ f	○		○ (12)
lecken	○ f	○		○ (6)
legen	○	○		○ (4)
stecken	○	○		○ (10)
strecken	○	○		○ (8)
verbrennen	○ f		○	○ (1)
ausstrecken		○		○ (9)
brechen		○		○ (13)
krallen		○		○ (26)
quetschen	○		○	
rühren		○ ü		○ (2)
wärmen			○	○ (16)
weglassen	○ f			○ (29)

biegen	○			
darauf haben	○ f			
geben	○ r			
in et3 haben	○ f			
krumm machen	○ f			
krumme F. machen	○ f			

共起する動詞	DS	B	Q	DWDS
legen/auf die Wunde	○ f			
schmutzig machen	○ f			
verstauchen	○			
wund schreiben	○ ü			
gleiten lassen		○		
lösen		○		
schließen		○		
abfrieren			○	
amputieren			○	
kreuzen			○	
reiben			○	
waschen			○	
heben				○ (3)
abschneiden				○ (11)
tauchen				○ (14)
recken				○ (15)
abhacken				○ (19)
abbeißen				○ (20)
abspreizen				○ (21)
kneten				○ (22)
auskugeln				○ (23)
reichen				○ (24)
bohren				○ (25)
abwischen				○ (27)
abreißen				○ (30)

DS = Duden-Stilwörterbuch, B = Buhofer et al. (2014), Q = Quasthoff (2010) ;

○ r = Redensart (DS), ○ ü = Übertragung (DS, B), ○ f = feste Verbindung (DS)

本稿で取り上げる名詞は、紙幅の関係から Finger 一語とする。また、比較の対象は辞典記述・コーパスデータの全体ではなく、2 種の統語関係、すなわち die Finger krümmen 「指を曲げる」などの「Finger4 格＋動詞」(DWDS 「ist Akk./Dativ-Objekt」)、および sich in den Finger schneiden 「指を切る」などの「[前置詞＋Finger]＋動詞」(DWDS 「ist in Präpositionalgruppe」)である。DS では項目末尾にまとめられている成句 (feste Verbindungen) もこの 2 種の統語関係で分類し直し、比較に含めた。

## 4.2. 重なりの状況

〈表 1〉は、辞典 3 種および DWDS における Finger 共起動詞の採録状況を○印で示したものである。配列は、共通領域 (○印が 4～2 つの部分) では重なりが大きい順、各グループ内ではアルファベット順、非共通領域 (○印 1 つの部分) では辞典ごとのアルファベット順、最後の DWDS は logDice 順である。

なお、もう一つの「前置詞＋Finger」の場合の共起動詞リストは、紙幅の都合で割愛せざるを得なかった。その内容にはしかし、以下、適宜言及する。

## 4.3. 若干の観察

### 4.3.1. 辞典・DWDS データの重なり

〈表 1〉の共通領域において複数の○印で示された重なり (データ全体に対する割合) は、昨年と同様の方法 (井口ほか 2018 第 4 章参照) で計算すると〈表 2〉のようになる。この計算方法では、共通領域の見出し語、すなわち辞典 3 種と DWDS のうちの 2 種以上に共通する共起動詞 (18; 以下、共通共起動詞) の、のべ語数 (49) に占める割合は、「Finger4 格」の場合で 36.7% となり、昨年同様低めである。また、「前置詞＋Finger」でも 46.9% (23/49) である。これは、各辞典、DWDS それぞれにしか見られない共起動詞 (のべ 31; 以下、非共通共起動詞; 「前置詞＋Finger」の場合は 26) を算入しているためである。

〈表 2〉	Finger4 格	2 辞典以上採録	18	[ 前＋Finger]	23
		のべ語数	49		49
		割合 (%)	36.7		46.9

### 4.3.2. 辞典・DWDS ごとの重なり

以上に対し、次の〈表 3〉は、各辞典および DWDS それぞれののべ語数に占める共通共起動詞の割合を示す。たとえば B では krümmen 以下 14 動詞がこの共通領域にあり、非共通領域は gleiten lassen, lösen, schließen の 3 動詞のみである (〈表 1〉参照)。このため、B に採録された Finger 共起動詞全体 (のべ 17) に占める 14 共通共起動詞の割合は高く、82.4% となる。これは、「前置詞＋Finger」の場合も同じである (〈表 3〉右側参照)。この数値は、〈表 2〉の示唆とは異なり、B が典型的な Finger 共起動詞の多くを記述に採録していることを示していると理解される。

〈表 3〉	Finger4 格	DS	B	Q	DWDS	[ 前＋Finger]	DS	B	DWDS
		共通	12	14	7	16	18	14	19
		総数	22	17	12	29	34	17	30
		割合 (%)	54.5	82.4	58.3	53.3	52.9	82.4	63.3



共通共起動詞の割合はまた、DS, Q, DWDS の場合でもそれぞれ 5 割を超えており、全共通共起動詞の半数以上が、それぞれの記述に含まれていることがわかる。非共通共起動詞の内容精査は別途必要であるが、これらをいったん外し、共通領域に限定してデータの重なりを考えれば、昨年の報告や 4.3.1. 節の〈表 2〉の示唆とは異なり、コロケーション辞典や共起データに一定の信頼性を確認することができる。

なお、〈表 3〉左側 DWDS ののべ語数が 29 であるのは gebrechen (brechen の誤り) を除外したため、右側に Q 欄がないのは Quasthoff に該当例の採録がないためである。

#### 4.3.3. 非共通共起動詞

〈表 3〉の示唆する共起データの一定の信頼性は、また、DWDS データに付された logDice 順からも確認することができる。すなわち、DWDS のみの 13 非共通共起動詞は、8 つが 20～30 位、4 つが 11～19 位の範囲にあり、逆に 1～10 位は、3 位の heben を唯一除き、すべて共通領域に入っている（〈表 1〉参照）。また、本稿ではリストを割愛した「前置詞+Finger」の場合も同様で、1～20 位の大部分は共通領域にあり、逆に 21～30 位の 6 動詞は非共通共起動詞である。この観点から辞典 3 種のデータを見直すと、間接的ではあるが、共起動詞の採録にあたり統計的共起度が一定程度踏まえられていることが見えてくる。

#### 4.3.4. 比喩的な成句の扱い

〈表 3〉の示す DS の数値は、しかし、B はもちろん、Q と比較しても低めである。これは、DS が Finger を含む成句表現を多く採録している（〈表 1〉の○r, ○ü, ○f; 22 例中の 12; 「前置詞+Finger」では 34 例中の 18）ことと関連していると思われる。なぜなら、コロケーション辞典は基本的に、当該見出し語の、表出・産出に有用な文字どおりの意味での共起情報（die Finger krümmen/spreizen 「指を曲げる / 広げる」など）を採録し、当該語を含んでいても当該語の意味とは無関係の成句表現（die Finger lassen 「かわかりを持たない」、keinen Finger rühren 「何もしようとしない」など）は採録しないはずだからである（Hausmann 1985:123 参照）。〈表 3〉で B や Q よりも数値が低く出ているのは、DS が定評に相違して、この点ではむしろ従来型の受容辞典としての性格を多分に有しているためと考えられる。同様に übertr. の表示を付して 2 例（rühren; schauen/auf）を示している B も、コロケーション辞典本来の役割から見れば中途半端と言えるだろう。

### 5. 形容詞・副詞から見たコロケーションと辞典記述

#### 5.1. 中心義と語義の順序について

多義語の場合、どのように語義を区分し、どれを中心義とするのかがまず問題となる。中心義となる条件として赤瀬川・プラシャント・今井（2016:122f.）は①共起語の頻度が高い ②共起語の種類が多い ③文法の制限が少ない ④共起語が具体的である ⑤語義ネットワークの中心に据えると語義ネットワークが描きやすい、を挙げている。中心義は単純に共起語の頻度から導き出せるものではない。「走る」や laufen のコロケーションにおいて、主語として「人」以外が上位に来るが、おそらく、日本語でもドイツ語でも実際には代名詞を含め「人」を表わすさまざまな語が使われているにも関わらず、残念ながらそれらを一括してコロケーションとしてとらえる方法はないことも一つの要因であろう。<sup>23</sup>

たとえば *schwer* は『アクセス』においては

- (5-1) ①重い、重量がある ②《数量》[…の] 重さの ③難しい、困難な ④つらい、苦しい  
⑤重大な、深刻な ⑥(体・心などが) 重苦しい ⑦(動きなどが) 鈍重な、ぎごちない  
⑧激しい、強い ⑨(食べ物などが) こってりした、(味・香りが) 濃厚な

という順序で語義記述がなされている。一方、DWDS-Wortprofil で *schwer* の付加語的なコロケーションを見てみると次のようになる(『アクセス』の語義に対応すると思われる番号を挿入した)。

- (5-2) 1.Verletzung ⑤ 2.Vorwurf ⑧ 3.Unfall ⑤ 4.Krise ⑤ 5.Krankheit ⑤ 6.Fehler ⑤  
7.Schlag ⑧ 8.Kampf ⑧ 9.Fall ⑤ 10.Waffe ① 11.Schade ⑤ 12.Kopfverletzung ⑤  
13.Verlust ⑤ 14.Niederlage ⑤ 15.Erdbeben ⑧ 16.Zeit ④ 17.Aufgabe ③ 18.Herz ⑥  
19.Körperverletzung ⑤ 20.Rückschlag ⑧

*schwer* は「重い」と「難しい」のどちらを中心義に据えるかについては議論のあるところだろう。いずれにしてもそれらが出てくるのは 10.Waffe や 17.Aufgabe である。頻度から見ると「重大な」が圧倒的に上位を占める。それならばいっそ「重大な」をトップに持ってくることを考えるべきなのかもしれないが、そうすると初学者たちはふつうに出てきそうな *Die Tasche ist aber schwer. Was hast du denn da alles drin?* (Tschirner 2008:94) で「その鞆は重大だ」と解釈することになる。

*schwer* において中心義が頻度的に裏付けられないのは、付加される名詞がさまざまな具体的事物になっているのが原因である可能性が高い。<sup>24</sup> 統計的なコロケーションの頻度だけで安易に中心義や語義の順序を決めるわけにはいかない。

## 5.2. 語義の区分について

独和辞典の記述においても一つ大きな問題となるのは、語義の区分、どのように語義を切り分けるかということである。

中野 (2017:25ff.) は英語の *safe* について次のような例を挙げ、「〈あるモノが危害に関わる恐れがない〉を基本義とするが、コンテキストの中では「モノ」または「危害」を活性領域として文脈の変種が生じる。」としている。

- (5-3) a. Your child is *safe*.  
b. This medicine is *safe*.  
c. This beach is *safe*.  
d. The subject/The investment is not *safe*.

つまり、a は危害を受ける可能性のある「モノ」、b は危害を与える可能性のある「モノ」、c は危害を受ける可能性のある場所、d は危害を与える「モノ」として心理的、金銭的なものが主体として想定されているというのである。

英和辞典においても、たとえば『ジーニアス英和辞典』第5版ではこれに対応するように意味記述が行われている。ほぼ①は a に、②は b に、④は c に、⑤は d に対応している。

- (5-4) ①<人・物などが> [危険・危害から守られて] 安全な、[…の] 危険 [恐れ] のない  
②<場所・物・行為などが> [人にとって /…をするのに] 危害を及ぼさない、安全な

- ③<人・物が>無事な、無傷な、危機を脱した
- ④<場所が>(窃盗・紛失・危機などに対して)安全な、厳重な管理の
- ⑤<行為・状況などが>リスクの(少)ない、無難な、確実な； (以下略)

一方で、『アクセス』では sicher が表す安全性は「安全な」で一括されている。では、ドイツ語では安全性に関して英語のような多義性はないのか。DWDS-Wortprofil で付加語的な sicher の上位 20 位までのコロケーションを調べてみると次のようになる。

- (5-5) 1.Hafen 2.Arbeitsplatz 3.Entfernung 4.Gespür 5.Tod 6.Listenplatz 7.Drittstaat 8.Ort 9.Sieger  
10.Instinkt 11.Seite 12.Anlage 13.Zeichen 14.Weg 15.Gefühl 16.Job 17.Indiz 18.Distanz  
19.Grundlage 20.Zukunft

また、述語的な用法の主語を見てみると次のようになる。

- (5-6) 1.ich 2.Rente 3.wir 4.er 5.Arbeitsplatz 6.sie 7.du 8.Mehrheit 9.Job 10.Welt 11.Polizei  
12.es 13.Experte 14.Erfolg 15.Geld 16.Platz 17.Straße 18.Land 19.Zustimmung 20.Sieg

safe の a に当たるものは上には見当たらないが 28 位の Kind に (5-7) の例がある。

- (5-7) Denn er hat durch Ahmeds Tod gemerkt, dass die *Kinder* auf der Straße nicht *sicher* sind, sie brauchen einen anderen, geschützteren Platz zum Spielen. (Die Zeit, 11.05.2009, Nr. 19)

b に当たるものも上位にはなさそうだが、まったくないわけではないようだ。<sup>25</sup> c に当たりそうなものとして、Hafen, Entfernung, Drittstaat, Ort, Seite, Distanz, Welt, Straße, Land がある。d に当たるものとしては、Arbeitsplatz, Gespür, Instinkt, Anlage, Weg, Gefühl, Job, Grundlage, Geld がある。

つまり、ドイツ語の sicher においても英語 safe で表されるさまざま意味の「安全」を表し得ると言えるが、独和辞典の語義としては区別されていない。ただ、どちらが学習者にとって有意義かというのは一概には言えないだろう。英語のように詳しく語義区分をしておくと、sicher を使おうとする場合には使えるかどうかの有意義な情報となり得る (3. で述べた「発信用」ということになる)。一方で、読んで意味がわかればよい場合には日本語で「安全な」という置き換えが可能なものについてはあえて区別するのは煩雑さを増すだけである (「受信用」)。さらに、ここには、英語にないドイツ語特有の問題も含まれている。

付加語的なコロケーション (5-5) で 2 位に Arbeitsplatz が挙げられているが、(5-8) のような例を見ると「安全な」というより「信頼できる、確実な」という意味であろう。また、同じリストの 5 位の Tod は (5-9) の例が示すように「(起こることが) 確実な」という意味であろう。これらは英語の safe にはない。

- (5-8) Ansonsten bietet die DB vielleicht nicht die höchsten Löhne, aber sie bietet *sichere Arbeitsplätze*. (Die Zeit, 28.11.2013, Nr. 48)

- (5-9) Die tapfere Berlinerin rettete einen Jungen vor dem *sicheren Tod*. (Bild, 30.11.2005)

述語的用法のコロケーション (5-6) の 2 位の Rente も同様であろう。さらに、述語的用法の主語には人を表す代名詞 ich, wir, du などが上位にあるが、これは ich bin sicher, dass ... のように「確信している」という sicher 特有の用法である。この語義を見落とすことがないようにするためには、「安全な」

を細分化するのはむしろ避けたい気がしてくる。つまり、全体を概観させるためには、あえて語義を細分化しないという現実的な選択肢もあるに違いない。

以上見てきたように、コロケーションを用いて多義語を分析し、記述するにはまださまざまな問題が隠れている。しばらくは手探りで進めるしかなさそうであるが、コロケーション分析により従来は見えなかったものも見えてくるという可能性もまた期待できるところである。

## 6. 用例記述のあり方

筆者は井口ほか（2018:63）で、「用例には、見出語の語法を示すとともに、見出語がどのような事態を描写するのに用いられるかを具体的に示すことで、意味の説明だけでは記述しきれない情報を与える機能がある。また、どのような話し手がどのような場面でそれを用いるかまでを示唆することも」と述べた。その具体例として、Duden. *Das große Wörterbuch der deutschen Sprache* の Parkplatz の例文、Ein P. für mindestens 100 Wagen, zurzeit leer (Frisch, Montauk 7)（少なくとも 100 台は入る駐車場、今はがらんとしている）を挙げ、「情景が目には浮かび」「それを見つめる人の気持ちを共体験し」「背景にまで思いを巡らせることができる」とし、「よい例文である」と評価した上で、『味も香りもある』独自性の高い例文をどう提示していくかは、いずれの辞典にとっても重要な課題であると思われる」（井口ほか 2018:64）と結論づけている。

本節では、用例の機能と構成について簡単に触れた後、筆者が創作を試みた「味も香りもある例文」の事例を紹介し、その特徴を考察する。

まず用例の機能について述べる。用例は例句と例文に大別できるが、例句が見出語の用法を端的に示すのに優れるのに対して、例文は用例の意味を厳密化するのに優れると言える。たとえば Anfang における例句 *den Anfang machen* は「真っ先に始める」という意味で用いられる表現であることを示しており、一見簡単に使えそうに思えるが、「真っ先に始める」は必ずしも一義的ではない。たとえば、教師が与えた課題を、他の者たちがぐずぐずしている中で、ある生徒がすぐに取り掛かる場合も「真っ先に始める」と言えるだろう。これに対して *Wer macht den Anfang?*（だれから先に始めますか）という例文があれば、数名がアイディアなどを持ち寄って討議するような場で用いられる表現であることは容易に想像がつき、課題に最初に取り掛かるような意味ではないことが明らかになる。この例文は『アポロン』に採用されたものであるが、類書として対比されることの多い『クラウン』では例文を付す代わりに「（真っ先に）始める」に「口火を切る」を追加して意味を厳密化しており、『アクセス』も同様の記述方法をとっている。また別の例として、*Verfügung* における *jemandem etwas zur Verfügung stellen* に関しては、『アポロン』、『クラウン』がいずれも「[人]<sup>3</sup>に[物]<sup>4</sup>を自由に使わせる」、『アクセス』が「自由に使用させる、提供する」とする中、『クラウン』のみが *Ich stelle Ihnen meine Wohnung zur Verfügung*「あなたに私の住居をご用意いたします」という例文を添えている。「自由に使わせる」という記述のみでは、たとえば自分の子どもなどに「（金などを）際限なく使わせる」や「（地下室などを）好き勝手に使わせる」ような意味をも含みうるが、上のような例文があればそうした誤解を避けることができる。『アクセス』は「提供する」を加えることで意味を限定している。

ところで、例文といってもその様相はさまざまである。たとえば、*Ich schenke ihm ein Buch.*（私は彼に本を贈る）（『クラウン』）のように文型を簡便に示すことが目的の「何の変哲もない」文から、冒頭に掲げた Duden の Parkplatz の例文のように、いわば「背景が写り込んでいる」ような生々しい現実感を伴うものまである。用例の構成としては、まず例句で用法を端的に示し、それから単純な文を経

てより複雑な文や特殊な意味を持つ文へと展開するのが自然であろう。『アクセス』の *besuchen* における「einen Verwandten *besuchen* 親戚を訪問する / Ich *besuche* dich an diesem Wochenende. この週末君に会いに行くよ / *Besucht* mich doch mal in meiner neuen Wohnung! 一度私の新居を見に来てください / Der Arzt *besucht* den Patienten. 医者が患者を往診する」などにそのような展開が見られる。逆に『アポロン』の *schenken* では、冒頭に枠囲みの形で Was soll ich ihr *schenken*? 「何を彼女にプレゼントしようかな」を掲げた上で、「Was *schenkst* du ihm zum Geburtstag (zu Weihnachten)? 誕生日(クリスマス)に君は彼に何を贈るの / [人]<sup>3</sup> [物]<sup>4</sup> als Andenken *schenken* [人]<sup>3</sup> に [物]<sup>4</sup> を記念品として贈る」のように、始めの方に例文、しかも決して単純ではない例文を挙げてから句例を出している。やや違和感を覚えるところである。

「味も香りもある例文」も上記に従えば後ろ寄りに配置されることになるが、そもそも「味も香りもある例文」とはどのようなものか、以下、西川ほか(2015)の中からいくつかの例を紹介し、考察してみたい。

(6-1) Du trägst ja nur einen Handschuh! Wo ist denn der *andere*?

片方の手袋しかしてないじゃないの。もう片方はどこ?

これは見出語 *ander* の例文で、*einen* と *der andere* を呼応させている。下校途中で片方の手袋をなくし、しょんぼりと帰宅した子どもと、それを見てあきれたような困ったような顔の母親の様子が目に浮かび、そこに可笑しみも感じられると思う。

(6-2) Der Ast *brach* unter ihrem Gewicht. 枝が彼女の重みで折れた。

これは見出語 *brechen* の例文である。散策の途中、手ごろな低い枝を見つけて腰を下ろす女性、その女性の体形、あわてふためく様子などを思い浮かべることができよう。

この2例に共通するのは、それぞれについて示したように、わずか一文ないし二文にもかかわらず、そこから事の詳細やその場の様子が容易に想起できること、またその内容がユーモラスであることである。辞典使用者にとって親しみやすい文だろう。これに対して、*Die einen kommen, die anderen gehen* (来るものもあれば、去る者もあり)、*Das Eis ist gebrochen* (氷が割れた) (『アポロン』) のような文は、別途文脈が与えられて初めて生きてくる表現であり、単独では無味乾燥である。

(6-3a) Die Schienen werden gerade transportiert und erst vor Ort *gebogen*.

レールはまっすぐな状態で運ばれ、現場に着いてから曲げられます。

これは *biegen* の例文で、多くの辞典使用者がまだ知らない情報を盛り込んだつもりである。雑学的知識ではあるが、「ひとつつ利口になった」と思わせることができるのではなかろうか。辞典使用者がすでに有している百科事典的知識をドイツ語でどう表現するかを示すことも辞典の用例が果たすべき機能の一つだが、単に表現を学ぶだけでなく、例文から新しい知識が得られるとすれば、辞典使用者がより関心を持って例文に接するようになると考える。

なお、この文はインターネット上の次の文に基づくものである。

(6-3b) Die Schienen kommen per Bahn aus Österreich, sind 15 oder 18 Meter lang und gerade. Alle Kurven werden erst vor Ort *gebogen* und angepasst. (<https://www.20min.ch/schweiz/bern/story/Schienen-fuer-Tramlinie-Bern-West-eingetroffen-15620522>)

(6-4a) Sie bindet ihre Schürze auf der linken Seite zu einer Schleife.

あの子はエプロンを左側でちょう結びにしているよ。

これは Seite の例文で、やはり雑学的知識あるいはドイツ語圏文化に関わるものだが、上記 (6-3a) とは異なり、ほとんどの辞典使用者にとって文の意味はわかっても、何を言おうとしているかは不明だろう。怪訝に思った辞典使用者が「エプロンを左側でちょう結び」といったキーワードでインターネット検索すれば、ミュンヘンのオクトーバーフェストで民族衣装を身にまとった女性が未婚であることを示す表徴であることはすぐわかるはずである。「いぶかしがらせる」というのも辞典使用者の関心を引く一つの手法である。なお、この文もインターネット上の次の文に基づいている。

(6-4b) Ist die Schürze auf der linken Seite zu einer Schleife gebunden, stehen die Chancen für einen Flirt nicht schlecht. Frauen die ihre Schürze so binden, zeigen damit, dass sie ledig sind. (<https://www.impulse.de/leben/wiesn-knigge/2029383.html>)

さて、最後に番外としてもう一文を掲げる。これは、西川ほか (2015) ではなく、筆者が以前、『アポロン』の violett の例文として提案したものである (ただし不採用)。

(6-5a) Unsere Katze hat ein *violettes* und ein *grünes* Auge.

うちの猫は片方がすみれ色で片方が緑色の目をしている。

多くの辞典使用者は、目の色が左右で異なる猫がいるとは思わないだろうから、面白く感じるのではなからうか。あるいはそんな猫がいるはずはないとインターネットで検索する使用者が出てきてもいい。この文もインターネット上の次の文を参考にした。

(6-5b) Das rechte Auge ist strahlend blau, das Linke hingegen schimmert geheimnisvoll grün. (<https://www.sat1.de/ratgeber/trends/coole-tiere/katze-mit-verschiedenfarbigen-augen-verzaubert-das-netz-050159>)

以上述べたように、例文そのもので状況が思い浮かぶような文、「クスッ」と笑わせるような愉快な文、「へー」と思わせる含蓄のある文、また、「えっ?」と不思議に感じさせる文などを配することで、用例を単なる表現形式の例示にとどまらず、辞典使用者に訴えかける力を持つものにするならば、それが生きたドイツ語への入り口になると筆者は考えている。

## 【註】

本稿は科学研究費補助事業基盤研究 (C) (一般) (平成 28 年～平成 31 年) (課題名: 「ドイツ語基礎語彙のコロケーションに基づく意味分析とその独和辞典記述方法の検討」 課題番号: 16K02667 研究代表者: 井口靖) の助成を受けたものである。

1 三重大学教養教育院教授 1. および 5. 担当

2 九州大学名誉教授 4. 担当

3 名古屋大学名誉教授 6. 担当

4 富山大学人文学部教授 3. 担当

5 東北大学高度教養教育・学生支援機構准教授 2. 担当

6 <https://www.dwds.de>

7 DWDS-Wortprofil の「hat Akk./Dativ-Objekt」項目のリストであるが、(2-4) の名詞はすべて対格目的語 (Akk.)

- である。なお、共起語を (logDice 順ではなく) 出現頻度順に表示させると、ihm, mir などの 3 格 (Dat.) もリストに加わる。これらは Bein, Arm などの身体部位が対格目的語として現れる場合、身体部位の所有者を示す所有の 3 格と考えられる。
- 8 Stab と Lanze はそれぞれ「～を非難する (den Stab über jn. brechen)」, 「～のために尽力する, 肩入れする (für jn./etw. eine Lanze brechen)」の意味で慣用的に用いられ、身体部位名詞の Genick と Rückgrat もそれぞれ (「首を骨折する」の意味の他に) 「破滅する, ひどい目に合う (sich das Genick brechen)」, 「～の意志をくじく; ～を経済的に破滅させる (jm. das Rückgrat brechen)」の慣用表現で用いられる。
  - 9 カン (2007) で行った「名詞 Ast と動詞 brechen の二語検索 (それぞれ変化形を含む)」の結果によれば、22 例中自動詞用法の事例 (たとえば, Der Ast brach) が 18 例, sein + 過去分詞の事例 (たとえば, (…), weil ein Ast gebrochen war.) が 4 例で, Ast を対格目的語とする他動詞用法は見られなかった。
  - 10 Duden-Universalwörterbuch では, kaputt|fahren の見出し語はあるものの, 形容詞 kaputt を参照させ, その用例として Er hat den Wagen kaputt gefahren が挙げられている。
  - 11 <https://cosmas2.ids-mannheim.de/cosmas2-web>
  - 12 再帰代名詞 3 例を含む。
  - 13 頻度 1 位は auch, 2 位は nicht である。
  - 14 „ändern“ で検索した場合, 多様な語句が入り, 文が長くなりすぎるため, zu 不定詞で検索した。
  - 15 Wortprofil では „hat Präpositionalgruppe“ に前置詞と名詞の個別的な結合が出力される。
  - 16 ( ) 内は, IDS のコーパスの例で, an 前置詞句あるいは daran と共起する数。
  - 17 DeReKo の例 (Die Presse, 12.02.1999)
  - 18 訳例は『アポロン』による。
  - 19 『アクセス』の「参考」. Duden(2015) の語義記述 „[durch Hinzufügen oder Streichen, durch Veränderung von Details] abändern, modifizieren“ によるとと思われる。
  - 20 Quasthoff ではそもそも動詞見出し語に名詞のコロケーションはない。
  - 21 ただし, 『クラウン』は ändern の項目中「参考」で, 他の「変える」を表す動詞と比較しつつ, verändern のより一般的な例を挙げている。
  - 22 井口 (2017:59) は, 「紙の辞典は全体が見渡しやすいので語義を体系化して示し, 電子辞典は効率を重視して頻度で並べる, あるいは, 利用者の目的により並べ替えができるようにする, という方法もありえる」と述べている。用例も, 利用者の目的により読解用あるいは会話用の用例を提示する, 頻度順に提示するといった可能性が考えられる。
  - 23 赤瀬川・プラシャント・今井 (2016:123) によると「走る」でガ格の頻度が高いのは人や動物ではなく, 「痛みが走る」「激痛が走る」などだと言う。ドイツ語でも DWDS-Wortprofil によると laufen の主語は代名詞を除くと Geschäft, Vertrag, Film, Verhandlung, Vorbereitung, Gespräch, Ermittlung, Verfahren などが上位に来る。また, 本稿 2. で指摘した「事柄の頻度」「人の関心度の度合い」も関係する。
  - 24 DWDS-Textkorpora で名詞の付加語となっている schwer の例 5000 について調査したところ約 3 割が 1 回限りの名詞で, そのうちの少なくとも 2 割が具体的事物を示し, 「重い」という意味と見なせた。(実際には Excel 上で文字化けし, 判読できないものもかなりあり, もう少し増える可能性がある。) schwer が「重い」という意味で用いられるときの名詞は多様で, コロケーションとしては拾えないものと思われる。
  - 25 DWDS-Textkorpora で „sicher Medikament“ を検索すると次のような, 「安全な」という意味を表わすと思われる例がいくつか見つかる。  
Ein solches Mittel, das gewissermaßen von der Natur selbst verwendet wird, wäre ein relativ *sicheres Medikament*. (Die Zeit, 12.02.1971, Nr. 07)

## 【辞典・語彙集】

- Buhofer, A. H. et al. (2014) *Feste Wortverbindungen des Deutschen: Kollokationenwörterbuch für den Alltag*. Tübingen.
- Duden (1993-1995) *Das große Wörterbuch der deutschen Sprache*. 2. Aufl. Mannheim.
- Duden (2017) *Das Stilwörterbuch*. 10.überarbeitete und erweiterte Aufl. Berlin.
- Duden (2015) *Deutsches Universalwörterbuch*. 8.Aufl. Mannheim.
- Tschirner, E. (2008) *Grund- und Aufbauwortschatz. Deutsch als Fremdsprache nach Themen*. Berlin.
- Quasthoff, U. (2010) *Wörterbuch der Kollokationen im Deutschen*. Berlin.
- 井上永幸・赤野一郎編 (2012) 『ウィズダム英和辞典』第3版 三省堂.
- 在間進他 (2010) 『アクセス独和辞典』第3版 三修社.
- 西川智之・Markus Rude・成田克史 (2015) 『ドイツ語基本 1000 単語』  
<http://german.ilas.nagoya-u.ac.jp/wp-content/uploads/2015/06/dd4a450e0394524ed3160d6fb7265a39.pdf>
- 根本道也他 (2010) 『アポロン独和辞典』第3版 同学社.
- 濱川祥枝他 (2014) 『クラウン独和辞典』第5版 三省堂.
- 南出康世編 (2014) 『ジーニアス英和辞典』第5版 大修館書店.

## 【参考文献】

- Hausmann, F. J.(1985) Kollokationen im deutschen Wörterbuch. Ein Beitrag zur Theorie des lexikographischen Beispiels.  
In: Bergenholtz, H. u. J. Mugdan (Hrsg.): *Lexikographie und Grammatik: Akten des Essener Kolloquiums zur Grammatik im Wörterbuch*, 28.-30.06.1984. Berlin. S.118-129.
- 赤瀬川史朗・ブラシャント パルデシ・今井新悟 (2006) 『日本語コーパス活用入門 NINJAL-LWP 実践ガイド』大修館書店.
- 赤野一郎・井上永幸 (編) (2018) 「コーパスは辞書編纂にいかにか寄与したか」 In: 『英語コーパス研究シリーズ コーパスと辞書』1-42, ひつじ書房.
- 井口靖 (2017) 「コーパスに基づく多義語の分析 ―日本語「読む」とドイツ語 lesen を例として―」 In: 『三重大学教養教育機構研究紀要』第2号. 53-62.
- 井口靖・恒川元行・黒田廉・成田克史・カン ミンギョン (2018) 「ドイツ語におけるコロケーション分析とその辞典記述の問題点」 In: 『三重大学教養教育機構研究紀要』第3号. 51-67.
- カン ミンギョン (2007) 『ドイツ語の「状態変化動詞」 ―「使役交替」を軸に』東京外国語大学大学院博士論文.
- 田野村忠温 (2010) 「日本語コーパスとコロケーション ―辞書記述への応用の可能性―」. 『言語研究 (Gengo Kenkyu)』138: 1-23.
- 中野弘三 (編) (2017) 『語はなぜ多義になるのか ―コンテクストの作用を考える― (シリーズ<言語表現とコミュニケーション> 1) 朝倉書店



# **Kollokationen und die Beschreibung der deutsch-japanischen Wörterbücher - die Möglichkeiten und Grenzen bei der Anwendung der Kollokationen zum Wörterbuch -**

Yasushi INOKUCHI, Motoyuki TSUNEKAWA, Katsufumi NARITA,  
Kiyoshi KURODA und Minkyong KANG

## **Zusammenfassung**

MuttersprachlerInnen behalten keine einzelnen Wörter, sondern zusammenhängende Einheiten als Kollokationen im Gedächtnis und verwenden sie im Sprachgebrauch intuitiv. Die Beschreibung dieser Kollokationen im deutsch-japanischen Wörterbuch trägt zum effizienten Erlernen des Deutschen bei. In der vorliegenden Arbeit wird zunächst auf Probleme der Bedeutungserklärungen aufgrund der Häufigkeit der Kollokationen eingegangen. Anschließend beschäftigt sie sich nach Wortarten mit den Fragen: welche Informationen den Verwendungsbeispielen der Verben hinzuzufügen sind, ob die Angaben der Kollokatoren des Substantivs in Kollokationenwörterbüchern zuverlässig genug sind, welche Probleme es bei der Reihenfolge und Gliederung der Bedeutungserklärungen der Adjektive und der Adverbien gibt und was sinnvolle und eindrucksvolle Anwendungsbeispiele sind. Durch diese Betrachtungen werden die Möglichkeiten und Grenzen bei der Anwendung der Kollokationen zur Beschreibung im Wörterbuch aufgezeigt.